創造的表現の開発　6

ー共通教材を生かし，音楽との豊かなかかわりを深める授業の構想ー

登　　浩　二

1　新しい学力観を見つめ直して

言うまでもなく，新しい学力観に立つ教育とは，内発的な学習意欲を喚起し，自ら学ぶ意欲や態度，思考力，判断力，表現力などの育成を学力の基本に据える考え方を重視する教育のことである。音楽への興味・関心は子供たちの内面的な心情にかかわるものであり，音楽の美しさや楽しさを深く感受することにより引き出され高められて行く。そして，この興味・関心が高まると，子供たちはよりよい音楽を求め，自ら音楽活動をしようとする学習意欲を示すようになると言える。すなわち，音楽への興味・関心・態度を育てるためには，まず子供たちがさまざまな音楽に積極的にかかわり，その美しさや楽しさを感じ取ったり味わったりする必要がある。

平成元年（1989年）３月15日，現行の学習指導要領が告示された。そして移行期間を経て完全実施されてから７年目を迎える。新しい学力観に立つ音楽科の学習指導も研究が進み，子供たちが自分のよさや可能性を十分に発揮して，音楽との豊かなかかわりを深め，自己実現をめざして生き生きとした活動を進めて行く姿が多く見られるようになってきた。子供一人一人の感性育成を基盤とする新しい音楽科教育がめざしているのは，このような子供を中心に据えた音楽の授業であり，「子供中心」あるいは「子供の側に立つ」音楽の授業の展開である。しかし，この意味が十分に理解されないのではないかと感じる場面に出会うことも少なくはない。

私が公務外で担当している合唱団の指導において，「ふじ山を学校で教えてもらわなかった」と言う５年生や「スキーの歌も冬景色も教科書にのっているのは見たが，その曲はとばして歌わなかった」という中学生など，「歌唱」共通教材が公立小学校で指導されなくなっているのではないかと思われる場面に出会うことが増えて来たこともその一つである。

2　共通教材設定の趣旨を振り返って

いったい身近な小学校の現場で「歌唱」共通教材の扱いはどのようになされているのだろうか。文部省唱歌「ふじ山」（３年生「歌唱」共通教材）について，私が公務外で担当している合唱団員のうち，小学４年生から小学６年生までの児童50名（広島市内小学校32校に在籍）に下記の項目で調査を行った。調査方法は教育芸術社教科書付録の範唱用CD（歌唱付）を２回聴いて，調査用紙に書き込む方法を用いた。その結果，

・「ふじ山」を学校で歌ったことがある。	14人	28%
・「ふじ山」を学校で歌ったことがあるような気がする。	４人	８%
・「ふじ山」を学校で歌ったことがないような気がする。	６人	12%
・「ふじ山」を学校で歌ったことがない。	19人	38%
・わからない（覚えていない）	２人	４%

意外な結果となった。（なお，これはあくまでも一例であって正式な調査ではない。したがって，この結果をもってただちに歌唱共通教材の実施率が低いととらえることは適切ではない。）ちなみに，「歌ったことがない」と答えた児童の所属校のうち数校の音楽担当教諭にその理由をたずねることができた。その結果，

・「曲想表現が難しくどのように歌わせたらよいのか，わからなかったから。」

・「歌詞の表す内容を理解させることは，本校の小学３年生では困難。」

・「教師主導の教え込みの授業になりそう。つくって表現とのギャップが大きい」
などの回答を得られた。

さて，この共通教材の設定は音楽科に独特なものであり，他の教科からは学習指導要領改定の度に，共通教材廃止についての意見具申があると聞く。また，共通教材不要論を唱える音楽教育学者も少なくはない。しかし一方，各国の海外邦人会などから共通教材が廃止されると，日本人ならばだれもが知って歌える共通の歌がなくなるとの理由で根強い反対があるのもまた事実である。

そもそも，共通教材が指定されている趣旨は，「歌唱」においても「鑑賞」においても生涯学習体系という視点から，音楽活動の自立が必要であるという点に集約できそうである。そして，特に「歌唱」共通教材の場合は，第一に我が国の音楽的文化遺産の継承と伝達，第二に全国民が同じ曲を歌うことにより得られる共通の感動体験が期待できる，この二点にあると考えられる。実際，日曜参観日などで「夕焼けこやけ」を題材に授業を進めると，子供の歌声に合わせて一緒に口ずさまれるおじいちゃん・おばあちゃんの姿に触れたり，「茶つみ」の手遊びうたを学習した後で「孫にお手玉を作ってやって，久しぶりに孫と一緒に私も童心にかえってお手玉遊びをしました」といったうれしいお便りをいただいたりすると，生活の中へと音楽を浸透させ，明るく潤いのある生活を追求する上からも，心を通い合わせる幸福感や懐かしさは私たちの日常生活に欠かせない，心の糧であることを深く感じさせられるのである。

音楽の授業は本来，子供たちが音楽を理解していく過程であり，音楽を好きになっていく過程である。すなわち，教師は子供の主体的な活動を重視しながらも，教えるべき事柄はきちんと教え，進むべき道筋を示すべき場面ではそれを明らかに示すことのできる姿勢が大切であると考える。特に共通教材の扱いにおいては，教師の好みに偏ることがないように十分留意する必要がある。

3　子供たちの創造的な表現活動の過程と学習指導の工夫
～3年生共通教材「ふじ山」（文部省唱歌）をテーマとして～

(1)　斉唱の扱いについて

斉唱は簡単のようであるが，実に難しい唱法である。そして，「ふじ山」を扱う3年生の11月頃から低学年の「楽しい・楽しい」音楽の授業から「楽しく・美しい」音楽の授業へと質的変換を図る必要がある。そのためにはまず従来の「同じ旋律をみんなが歌う」程度では質的向上は望めない。それは，斉唱には深い内容が包含されていると考えるからである。その第一は「主旋律しかない」ということである。美しい斉唱にするためには，主旋律の美しさが教師自身のイメージの上になくてはならない。具体的には，レガート唱とはどういうものかについての認識であるとか，ふしまわしとはどういうことなのかについての解釈が考えられる。そして，これらを理屈ではなく感覚として，子供たちが身につけることができるようにすることが，教材研究の上で重要になってくると考える。

(2)　研究テーマとの関連について

そのために，私は低学年の授業から一人で歌うということを大切にしてきている。そして，最低一学期間に一回は休憩時間などを利用して子供一人一人の声を教師と一対一で聴くことを積み重ねて来た。そして，一人一人の声をテープに録音し授業で活用している。これは，「歌うことは，息をすることと同じだね」（2年生児童の感想）のように音楽を感覚的にとらえるための一助となるとと

もに，自信をもって歌うことができるようにするためにも有効であると考えている。さらに音楽専科という立場から考えると，音楽を通じて子供一人一人と教師との人間関係や信頼関係も深まって行くことも感じている。こうした活動を大切にしている意図は，独唱できる力をつけている子供が集まって初めて斉唱が成立すると考えているからである。音楽科の基礎基本と，本校の研究テーマである「自立」を考える時「一人一人は歌えなくても，みんなが集まって歌えば何となく斉唱になる」式授業法であってはならないと思う。すなわちそれぞれに自分の歌に自信を持っている子供たちが集まって，お互いによいところをそれぞれが強調しあいながら斉唱する方が豊かで音楽的な発展が望めると考える。

(3) 児童の実態を踏まえて

しかし，一人一人の声を聴いていると歌唱力・個性・音楽のし好の度合いなど様々な子供が寄り集まって学級が形成されていることを痛感する。この場合，大切なことは「ここのところはこう歌いたいのだ」「この辺の音程は得意だから思い切って歌おう」などその子なりの音楽に対する思いがあり，曲の一部分でもいいから表現できる力を持っていることであろう。そのためにも教師が一人一人の声を知り，思いを知りそして「君はこの辺りの音程はすばらしくよくはまっているね」，「君は飛行機が大好きだから，飛行機の上から見た富士山の写真がないかインターネットで先生と一緒に探してみようよ」など個々の実態や趣味なども把握して，子供と教師との人間関係を日々密接にし，子供に「考えるてがかり」をできるだけ多く示しておく努力が極めて重要である。

4 参考事例ー子供一人一人が個々のイメージを生かして，様子を思い浮かべて表現することを楽しむ授業の工夫

続いて紹介する事例は本校の3年生単式学級を対象として実践したもので，共通教材を生かし，音楽との豊かなかかわりを深めることを重視したものである。

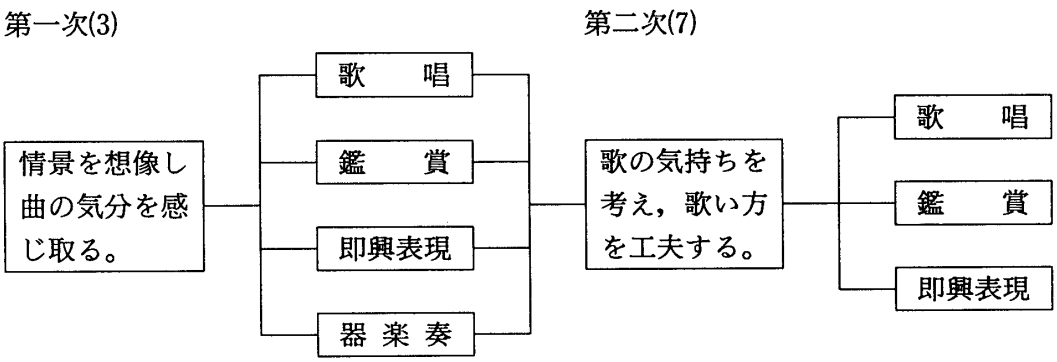
(1) 題材設定の工夫

【題材】 ようすを　おもいうかべて

【題材設定の理由】

児童はこれまで，生活の中に音楽があり音楽の中に生活がありたいという教科担任としての願いから行事の歌・集会の歌・一日の歌・四季の歌・日本民謡・外国語の歌・世界民謡・国歌・クラッシックの名曲・詩吟など年間百曲程度の歌と親しむ活動を続けてきている。その中で児童は，拍の流れにのって楽しく歌う経験は積み重ねているが，音楽に対するイメージを持ちそれを表現に生かしていくという学習経験はまだ浅い。本題材においては，歌詞の表す情景を想像しながら，自分のイメージを曲想表現に生かし合い，友達と声をそろえて歌う活動を経験することにより，自己表現の幅を広げようとする意欲を育みたい。

【指導内容と計画】 10時間扱い



【題材の目標】

ア　歌詞の表す情景を想像して，歌の気持ちに合った歌い方を工夫できるようにする。

イ　曲想を感じ取ったり，表現の工夫について考えたりしながら聴くことができるようにする。

【題材の評価基準】

ア　自分の声に関心を持ち，進んで歌おうとしている。

イ　曲想をイメージし，工夫して表現しようとしている。

ウ　音程に関心を持ち，歌の気持ちを感じて歌っている。

エ　歌の気持ちを感じて聴いている。

(2)　教材の設定とその活用の工夫

ここでは目標を実現するため，４つの教材を設定した。いずれも歌詞の表す情景や歌の気持ちなどをイメージして歌うことにより，音楽的な深まりが期待できる作品である。

①　「もののけ姫」(宮崎駿作詞　久石譲作曲)

子供たちに人気の映画主題歌である。映画のサウンドトラック盤を用意し，カウンターテナーの歴史などもおりまぜて鑑賞及び歌唱教材として活用した。さらに，同映画の名場面を集めた写真集を用意し，歌詞の表す情景や登場人物の気持ちなど場面場面ごとに想像したりしながら，音楽づくりを行った。

②　「こねこと小鳥」(岩見俊太朗作詞　黒沢吉徳作曲)

子猫と小鳥の様子が擬音語を交えてユーモラスに描かれている。各節とも短い歌詞で覚えやすく，情景を想像しながら身体表現を交えて子猫と小鳥に別れて交互唱を行った。２番の「あわてて」「いきなり」の部分では表現の工夫として強弱の変化やテンポの変化の要求がまず子供たちから出された。

③　「こねこと小鳥のおしゃべり」(黒沢吉徳作曲)

本来は合奏教材であるが，子猫（ニャオ）と小鳥（ピッ）の擬音語による歌唱教材として活用した。これは教師が意図したことではなく「こねこと小鳥」の身体表現が楽しく発展していった形で子供たちからの要求による。身体表現に熱中するあまり音程が不確かとなる傾向があったので，パートリーダーを決めソプラノリコーダーで音程を示すなどの支援を行った。

④　「ふじ山」文部省唱歌

明治43年より歌い継がれ親しまれている曲である。音形やリズムがかなり自由な二部形式であるが，ゆったりとした旋律の中に力強さ，雄大さを含んだ歌曲的なつくりとなっており，曲想の表現において個々の思いを生かすことが可能で歌い込める曲の一つである。この曲の指導にあたっては上記の①～③の学習を基盤として学習を進めた。

(3)　自立に向けて，感受の深まりを意識した学習内容の工夫

子供たち一人一人の音楽的な感受の深まりを基盤とする活動を充実させるため，表現と鑑賞の関連を図る内容を工夫するとともに，子供たちが自分の工夫を互いに出し合いながら協力して音楽表現を作り上げる場面を用意した。

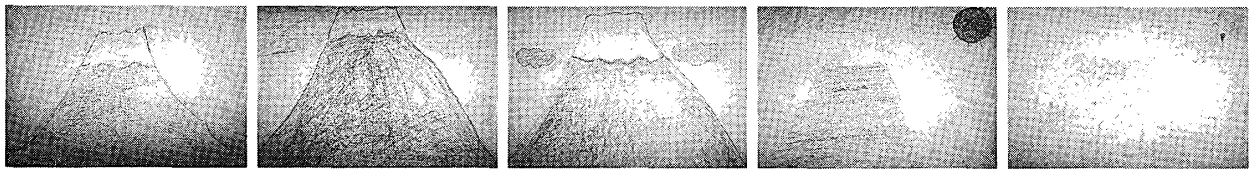
○「もののけ姫」の主題歌を聴いて，歌の表す雰囲気や気持ちを，同映画の名場面を集めた写真集の場面ごとの絵を見ながら想像し，歌詞の表す情景や登場人物の気持ちなどを話し合い，音楽づくりを行う場面。

○「こねこと小鳥」の歌詞やリズム，そしてメロディをてがかりとして，子猫や小鳥の気持ちや情景を想像し，音楽物語風に劇的表現や身体表現を交えながら楽しく遊ぶ場面。

（含む「こねこと小鳥のおしゃべり」）

○「ふじ山」の範唱用CDを聴いて，自分がイメージした様子を話し合ったり絵で表現したりする場面。**(資料１)**

◆資料１



○「ふじ山」について，自分がイメージした様子を話し合ったり絵で表現したりしたことをてがかりにして，自分の表現したい「ふじ山」の様子を選ぶ場面。

（**資料７**に示した５枚の写真をＡ３に拡大カラーコピーして子供に提示した）

○集まった友達とともに，個々のイメージや思いを話し合い「ふじ山」の曲想表現の工夫を行う場面。（**資料２・３**）

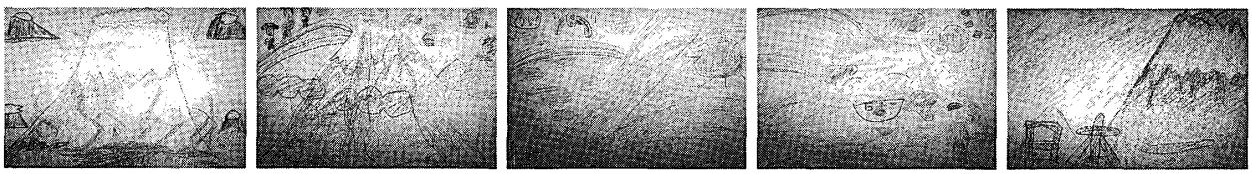
○自分たちの思いを込め工夫した「ふじ山」を，他のグループの子供たちに聴いてもらいながら歌い，お互いに評価し合ったり自分たちの歌を録音によりふりかえり，さらに曲想表現の工夫や思いを伝える表現技術を深める場面。（**資料４**）

◆資料２　◆資料３　◆資料４　◆資料５

○自分たちの「ふじ山」を自信をもって表現する場面。（**資料５**）

○学習をふりかえりながら，自分が思いを深めた富士山を個々が絵に表す場面。（**資料６**）

◆資料６



(4)　様子を思い浮かべながら音楽とのかかわりを深め，自分たちの音楽をつくり上げるための学習過程の工夫

音楽的な感受の深まりが音楽づくりに具体化できるよう，子供たちの意識の変容を重視しながら次のような学習過程の工夫を行った。

【題材全体の進行の工夫】

《イメージをつかむためのてがかりを知る段階》⇨《てがかりをもとに，イメージを自分たちの感性で形成し合いながら，感受したことを身体表現しながら歌唱で表現する段階》⇨《イメージを個々がつかむ段階》⇨《イメージをお互いに深め合う段階》⇨《お互いに深め合ったイメージをてがかりとして工夫する段階》⇨《工夫したことを音楽づくりに生かす段階》⇨《演奏する・さらに工夫する段階》⇨《自分たちの演奏をふりかえる段階》⇨《応用する段階》⇨《発展する段階》

【単位時間ごとの学習の進行の工夫】

《つかむ》⇨《めあてをつくる・工夫する》⇨《工夫する・つくる》⇨《表現する》⇨《ふりかえる》⇨《次時へのめあてをつくる》

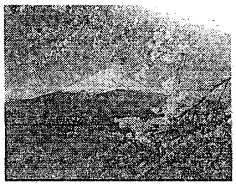
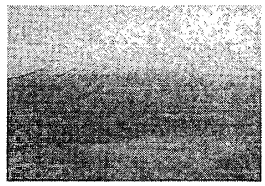
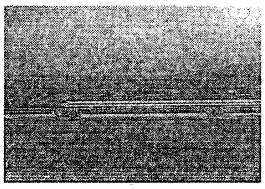
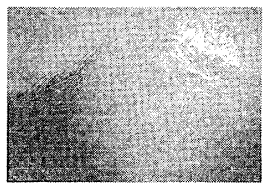
これは，既述３節の「３　子供たちの創造的な表現活動の過程と学習指導の工夫」を具体化したものである。

(5) 子供の反応と変容

「ふじ山」導入時（第２次第１時）の資料１と，題材最終時（第２次第７時）の資料６を比較して子供の反応と変容について考察を進めると，導入時はいわゆる頭の中で知識としてつかんでいる「ふじ山」の形を表現したのみと考えられ，音楽との関連は薄いと思われる。しかし一連の曲想表現の学習を行う中で，第１次の学習や教師が用意した５種類の富士山の写真などをてがかりとして，歌詞や音楽の中へ入り込んで行くことにより，個々のイメージを深めて行ったことが想像される。また，資料１では富士山とともに自分自身の姿が描かれているものは皆無であったが，資料６では自分や友達をかみなり様や雲と一緒に描いているものが多く見られた点も興味深い。

さらにグループ活動の場面では，テンポ・リズム・ダイナミズムなどの観点から活発な話し合いや，表現の工夫が展開されていた。発表の直前には音程を確かにするため，リコーダーやピアノで音取りを繰り返していた。この場面における教師の主な支援事項は，「同じ旋律を歌っていても，イメージする富士山は個々ばらばらであたりまえ」ということに終始し，毎時間クラス全員の子供の思いや歌声を聞くことに努めた。

◆資料７

「ふ」グループ  《15人》	「じ」グループ  《15人》
(子供がまとめた曲想表現のめあて)桜の美しい感じを出すとともに，富士山の大きさや広さを表したい。	(子供がまとめた曲想表現のめあて)夕日があたって，富士山が輝いているようすを出すために，ゆっくりと歌う。
「の」グループ  《３人》	「や」グループ 《２人》
(子供がまとめた曲想表現のめあて) すっきりとした声で歌うことによって，このきれいな富士山と明るいこの花の様子を表したい。	(子供がまとめた曲想表現のめあて) 富士山が大きく見えるのでしっかり声を出すが，お花が明るい色なのでそれを大切に明るい声にする。
	「ま」グループ  《３人》
	(子供がまとめた曲想表現のめあて)この富士山一つの絵のように，でんと大きく歌いたい。１番は１人，２番は３人全員で歌って盛り上げたい。

5　おわりに

本題材を終えてうれしく思うのは，斉唱の持つ「みんなで心を合わせて歌う楽しさ」を子供たちが感じながら学習を進めていた様子ある。子供たちの最後の演奏を聴き終えて，私は「親しみ・暖かさ・量感」を感じた。そしてみんなが同じ旋律を歌っている中にも自分なりの思いを込めて歌っている姿や，そこから生まれ出る音楽は美しさを感じさせてくれた。斉唱はみんなが同じ旋律を歌うので，その点は容易と言える。だから，歌い込みさえすれば一人一人に自信が生まれ，それが心の余裕となる。その余裕が自分の思いを入れることができる場所となるのであろう。どんな小品であろうと，その曲の持つ「生命」を歌い上げるということは，大変な労作である。だからこそ，一つの曲を深く掘り下げて，納得の行くまで旋律を歌い込むという学習は重要である。共通教材はそのための，多くのてがかりを与え続けているように感じている。(本校教諭)